

ざりがならい也、かざりと云は、三疊大にても、水さしの前に竹輪置横にひまやくを置べし、又は大目の外へ出しかざること、も有、四疊半にても、一疊半に而もかざるべし、但し一疊半は、いつとも水指の前に置べし、又棚物の時は、たなの前にもおく、ふたおきにひしやくかけ置ことは、何にても名水の素と云物也、扱は名水にて可有と、必湯にて吞ことが客ぶりの大事也、か様にせざれば、てい主に恥をあたゆると云物也、是をぬからず、に客ぶりすべし、去方にか様にして有を、常のごとく座に付れたれば、後には、てい主不機嫌に而、そこゝあいえらいて、てい主俄に用が出來たると、他出せられ、其日の茶之湯は無之由、去人はなしにて、おどろき入たり、是といふも客に參られたる衆々の、茶之ゆ不功者故也、とかく習を知て出さするは、客の大功者と云物也、

## 柴火會

〔南方録二〕柴火之會　ふすべ茶湯也、野がけとも云々、

ふすべ茶湯と云事は、俗名也、野がけの事也、大善寺山、又當國前箱崎松原とて、休居士のはたらきに、松陰成故、松に雲龍の小釜を釣て、松葉をかき寄、さわくと湯をわかし、わき立のぼる松風の一聲、煙の立のぼる體面白しとて、殿下秀吉豊臣其後野遊の御時は、たびゝ休にも宗無宗及にも、かのふすべ茶の湯を出候へと被仰しより、皆人ふすべ茶湯と云也、糺にての時は、水邊故、三本竹にて釜掛られしと也、主客の心も清淨潔白をもと、す、此時計り清淨にするには、あらず、茶一道もとより得道の所に、ごりなし、出離の人に、あらずしては、なりがたかるべし、手わざの諸具共に、定法なきが故に、定法大法有、其子細、唯一心得道の取おこなひ、形の外のわざ成故に、なまじいの茶人、かまいてゝ無用也、天然と取行べき時あるべし、器物杯水を、ぎて、さわやかにするを第一とす、興を催し過れば、雑席のやうに成、うとゝ、まければ、景氣にうははる、なり、かの千山萬水の景氣も、此釣釜のへり取、一二席の眞味にもとづきて、まかも他の境にあらず、景氣が體に成て、茶席が用に成と、茶席が體に成て、景氣が用に成るの遠也、茶を體にする程の茶人、今世に難